

2019/12/30-2

(英語教育に関する文科省への提言 その2)

何も難しい話から入る必要はありません。一点非の打ちどころのない完璧な話から入ろうとすると、何も話せなくなってしまいます。完成までにあまりにも時間がかかるからです。いや、完成したと思える頃には話のタイミングを失していることになります。

生活レベルの話から入ればいいのではないのでしょうか？

それなら難しい単語は必要ありません。ジェスチャーや表情も盛り込みやすいし、適宜話の役に立ちます。

何より皆さんが興味を抱きます。興味を抱くので入りやすいのです。

確かにもう少し込み入った話になると、それ相応の語学力がいます。

例えば生活レベルの話で「怒った」「笑った」「泣いた」「喜んだ」「がっかりした」などの次に、ではなぜそう感じたり思ったりしたのかという段になると話がいささか込み入ってきて上記でいうところの「それ相応の語学力」がいることになります。

しかし「適切な」何故そう感じるのか、そう思うのかの答えを得る前段で、その人の空間の移動の仕方やら、その人の過去の大まかな歴史を知ること、ある程度、その「何故？」の答えを類推することはできます。非常に簡単な単語と文法で。

ここで一番大切なのは、そう手間暇かけてまでしたいと思う「相手に対する興味、関心」を抱くことだと思います。

この「隣の人は何する人ぞ？」が今の人たちに一番欠けていることのような気がします。

「人は人。自分は自分。相手の領分をおかさない代わりに自分の領分もおかさなくてくれ」と一見聞こえのいい正論にも聞こえますが、その実「相手を無視し、自分勝手に凝り固まっているだけ」のような気もします。

左から右に向けて半弧を描き、右から左に向けて半弧を描いても、重なる部分がないと、まじりあう部分が生まれません。又その間を落下物(危機や危険、問題)が通っても、引っかかることなく、そのまま下に落ちてしまいます。人が大勢いてもセーフティーネットにならないのです。そうして一番の問題は弧と弧に閉じこもって交わりがないので、気づかぬうちに本人たちの「孤立」や「孤独」を産んでしまうのです。

要するに現在の我が国の英語教育は「コミュニケーション障害製造装置」でしかないのではないのでしょうか？

(続きあり)

(前からの続き)

2019/12/30-2

(英語教育に関する文科省への提言 その2)

昔「エロ本」を禁じられれば禁じられるほど「見たくなった」ものです。もし「いくらでも見ていいぞ」と言われれば、そんなに見たくならなかったかもしれません。

だとすれば、受験英語に端を発した「厳密な採点」を止めるとか、英語を逆に主要三教科か

ら外すとかして逆に締め付けを止めて「緩めた」方が、余程皆さんの英語能力は上がるのではないのでしょうか。高すぎる最初のバーをうんと低くするのです。

「誰でも入りやすいように、策の高さを低くする」

そもそも外国人にとって日本人が英語を話すか話さないかは、その人の「インテリジェンス」の問題でも「ステータス」の問題でもありませんし、そういった評価もからは全くしておりません。

彼らが、思うのは、単に「あ、この人英語話す。助かる～」くらいのものなのです。

「Oh, you are English speaker!! So helpful」

その点をわが国国民各位は完全に思い違いしているような気がしてなりません。

「I can speak English. I`m a person in High-Society class. Don`t you get a surprise?」

そんなことはだれもおもわないのです。外国の方は。

まずその認識から変える教育を始めてはいかがでしょうか？

(追記)

令和元年 12月30日

文部科学大臣 萩生田様

以上は、先回12月20日付け Facebook 掲載記事（書面送付日は12月22日）「英語教育に関する文科省への提言」の続編でございます。ご査収お願い申し上げます。

川崎市麻生区王禅寺東5-34-7  
宇都宮 一貴